Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-26

尼崎市立地域研究史料館と大学 : 地域を志向した教育・研究（<特集>地域歴史遺産の「活用」を問い直す : 地域資料館の可能性）

大江, 篤

(Citation)
Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報,11:34-47

(Issue Date)
2019-12

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81011926

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011926

尼崎市立地域研究史料館と大学――地域を志向した教育・研究――

大江　篤

はじめに

園田学園女子大学は、兵庫県尼崎市に位置し、人間健康学部（総合健康学科・人間看護学科・食物栄養学科）、人間教育学部（児童教育学科）、短期大学部（生活文化学科・幼児教育学科）で構成される在籍数約二〇〇〇人の小規模な女子大学である。本学の教育は、建学の精神「捨我精進」にもとづき、「他者と支えあう自立した女性の育成」を目指している。この建学の精神は、一九三八（昭和一三）年に本学の前身である園田高等女学校が設立されたときに掲げられた。創設者の園田村長・中村龍太郎は、戦時下という状況にありながら、地域の女子教育振興を図りたいという熱い思いを抱き、建学を成しとげた。以来、この精神は本学の教育に脈々と受け継がれている。一九六三（昭和三八）年に短期大学、一九六七（昭和四二）年に大学を開学。「大学は地域と共に歩み、地域と共に呼吸をして発展すべきである」という考えから、大学の地域開放および生涯学習において先駆的な役割を果たしてきた。二〇一三（平成二五）年度には「地（知）の拠点整備事業」（大学ＣＯＣ事業）に採択された（図1）。

尼崎市は、戦前から都市化が進み、少子高齢化をはじめとする成熟都市にみられる多くの課題を有している。近年、人口の減少が現実のものとなり、少子化・高齢化の一層の進行により、人口の年齢構成や世帯類型の構成が変化していくなかで、尼崎市においても、家族や地域コミュニティの状況が変化している。また、尼崎市の生活保護率は兵庫県下で最も高く、深刻な問題となっている。高齢化にともなう医療や介護といった社会保障関係の費用は増大していくものと予想される。このような現状のなかでの地域課題について、二〇一三（平成二五）年に策定



図１　大学ＣＯＣ事業「〈地域〉と〈大学〉をつなぐ経験値教育プログラム」

された「尼崎市総合計画」に提示されている「ありたいまち」が実現できるよう、研究・教育のシーズによって地域課題を解決に導き、活性化に本学が寄与できると考え、大学ＣＯＣ事業に申請した。そして、この事業において、地域を志向した「教育」「研究」「社会貢献」という大学の機能を強化し、様々な仕組みづくりを実施してきた。二〇一六（平成二八）年度の中間評価でＳ評価をいただいた。七六件（八〇大学）の取り組みのなかで、Ｓ評価は七大学、私立大学は本学のみであった。

二〇一五（平成二七）年度からは、「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」に継承されている。前者では「〈地域〉と〈大学〉をつなぐ経験値教育プログラム」、後者では、申請大学の神戸大学、兵庫県立大学、神戸市看護大学や行政、産業界とともに「地域創生に応える実践力養成ひょうご神戸プラットフォーム」を形成している。

小稿では、「地域と共に歩む」大学である本学が教育・研究・社会貢献において、尼崎市立地域研究史料館とどのように連携し、地域歴史遺産の活用に取り組んできたかについて報告し、今後の課題についてまとめてたい。

一　【社会貢献】公開講座・歴史セミナー

園田学園女子大学は一九七九（昭和五四）年より、「地域と

ともに歩む」大学として施設（テニスコートやグラウンド）の開放等や土曜公開講座を実施した。一九八二（昭和五七）年には、学生と社会人がともに学ぶ公開講座「人間を考える」を開講し、現在も継続している。さらに、二〇〇二（平成一四）年には、社会人の継続的な学習のため、三年制のシニア専修コース（文学歴史学科、国際学科、情報学科）を開設。講座数は年間約一〇〇講座、受講者数約一〇〇〇名の規模に発展している。女子大学ではあるが、シニア世代の男女や子どもを連れたお母さんたちがたくさんキャンパス内に溢れている。このように本学は多彩な生涯学習を展開しているが、その一つとして、公開講座「歴史セミナー」がある。

二〇一七（平成二九）年度は尼崎市制一〇〇周年にちなんで「尼崎の歴史」、二〇一八（平成三〇）年度は「尼崎城の再建」を契機に「城と城下町の歴史と民俗」というテーマを設定し、年間通じて一八回程度の講座を開き、約九〇名の受講生があった。これらの講座には尼崎市立地域研究史料館にも講師を依頼し、連携講座として開講している（図2）。

この他、二〇一七（平成二九）年度には、史料館と大学の共催で『たどる調べる尼崎の歴史』（尼崎市立地域研究史料館、二〇一六年）の入門講座を開催した。講師は、古代入門編・史料編（五月一三日）高橋明裕（立命館大学非常勤講師）、中世入門編・史料編（七月三日）市沢哲氏（神戸大学大学院人文学研究科教授）、樋口健太郎氏（龍谷大学文学部特任准教授）、近世・近現代入門編（七月二九日）岩城卓二氏（京都大学人文科


【2018年度　公開講座・歴史セミナー「城と城下町の歴史と民俗」】

2018年は、尼崎城址公園内に尼崎城が再建されます。兵庫県下には世界文化遺産の姫路城はじめ、古代から近世に至るまで多くの城・城跡・城下町があります。朝来市の天空の城・竹田城跡は多くの人が訪れています。この講座では、人々を魅了してやまない「城」とそこでの暮らしに着目し、城下町の民俗や伝説も取り上げます。歴史学、民俗学の研究者が最先端の研究成果にもとづいて、わかりやすく解説していきます。

大江篤（園田学園女子大学人間教育学部）
ガイダンス―城と城下町の民俗学
中本和（関西学院大学非常勤講師）
古代の城①
―東北の軍事拠点：多賀城を中心に―
小板慶介（関西学院大学非常勤講師）
古代の城②―大野城
原明志（関西学院大学非常勤講師）
古代の城③―水城・鬼ノ城（朝鮮式山城）
小栗栖健（神戸女子大学古典芸能研究センター・播磨学研究所副所長）
城下町祇園と三ツ山大祭
渡岡真弓（播磨学研究所運営委員兼研究員）
城下町の伝説を読む・白鷺城のお姫元
南嶋晃子（神戸大学学術研究員）
おさかべ姫とは何か
―藩体制の形成と怪異譚
久留島元（日本学術振興会特別研究員PD）
尼崎城下町の怪談
中村直人（本学シニア専修コース講師）
戦国期の城・丹波八上城
大村拓生
（ひょうご歴史研究室 歴史研究推進員・関西大学非常勤講師）
南北朝・室町期の赤松氏と白旗城
桂原康人（大阪大谷大学非常勤講師）
家記にみる城と館
生駒孝臣（関西学院大学非常勤講師）
鎌倉時代の館と城
久下隆史（民俗芸能学会評議員）
城下町の祭礼
辻川敦（尼崎市立地域研究史料館館長）
尼崎城築城と戸田氏鉄
村野未央（尼崎市立地域研究史料館）
尼崎城と尼崎藩主・青山忠利
中村光夫（尼崎市立地域研究史料館）
尼崎城　城郭と藩士たち
岩城卓二（京都大学人文科学研究所教授）
尼崎城主の役割
北川央（大阪城天守閣館長）
豊臣秀吉の大阪築城と城下町建設

図2　2018（平成30）年度　歴史セミナー「城と城下町の歴史と民俗」

学研究所教授）、辻川敦（尼崎市立地域研究史料館長）であり、園田学園女子大学を会場とし、大江が登壇した。尼崎市立地域研究史料館では、『尼崎市史』通史編、『図説尼崎の歴史』を読む会を継続的に実施しており、平成二九年度からは、新たに刊行された『たどる調べる尼崎の歴史』をテキストに加えることになった。そのキックオフの講座を大学で開催した。

さらに、史料館と大学に市民団体（あまがさき市民まちづくり研究会、サロン・ド・サモン、尼崎まちづくりネットワーク）も参加して実行委員会を立ち上げ、市制一〇〇周年に向けて四年間かけて尼崎を歩く講座「歴史の旅in尼崎～北から南へ～」を開催した。

二〇一二（平成二四）年一〇月一三日には、オープニングセッションを本学で開催した。〔第1部〕では、実行委員長の正岡茂明氏（あまがさき市民まちづくり研究会代表）が企画の趣旨を述べ、市内の歴史を活かしたまちづくりの事例紹介を行った。「猪名寺の挑戦」（園田学園女子大学学生）「小田会＆歴史のまち神崎」（正岡茂明氏）「杭瀬商店街を行く」（園田学園女子大学学生）の三つの報告があった。〔第2部〕は、尼崎市立地域研究史料館の辻川敦館長による記念講演「歴史と人をつなぐ尼崎の旅」を実施した。四年間で歩いたコースは、図3のとおりである。毎回、『図説尼崎の歴史』をもとにしたオリジナルの資料を配布し、実行委員や地域の方々に訪れた先々で解説をし

① 2012 年
Ⅰ：ＪＲ猪名寺→猪名寺廃寺→田能遺跡→猪名川自然林→阪急園田
Ⅱ：阪急園田→戸ノ内橋→神崎総合センター→遊女塚・神崎渡し跡→ＪＲ尼崎
Ⅲ：ＪＲ尼崎→浄光寺→寺江亭跡→杭瀬市場→阪神杭瀬
② 2013 年
Ⅰ：ＪＲ塚口→御園古墳・岡院石棺→塚口寺内町→近松記念館→ＪＲ尼崎
Ⅱ：ＪＲ尼崎→中国街道→残念さん→大物主神社→阪神大物
Ⅲ：阪神大物→ユニチカ記念館→尼崎城址→築地→阪神尼崎
③ 2014 年
Ⅰ：阪急塚口→富松城址→尾浜八幡神社→水堂須佐男神社→ＪＲ立花
Ⅱ：ＪＲ立花→七松八幡神社→難波八幡神社→熊野神社→三和市場→阪神尼崎
Ⅲ：阪神尼崎→貴布禰神社→寺町→阪神出屋敷
④ 2015 年
Ⅰ：阪急武庫之荘→バス→六樋→コスモス畑→西武庫公園→大井戸公園→阪急武庫之荘
Ⅱ：ＪＲ立花→松原神社→琴浦神社→大庄公民館→阪神尼崎センタープール前
Ⅲ：阪神出屋敷→（バス）→スポーツの森（21 世紀の森）→運河→阪神武庫川

図３　「歴史の旅 in 尼崎～北から南へ～」コース一覧

ていただいた。

また、この講座では、できるだけ若い世代に地域歴史遺産を知ってもらう試みとして、高校生に歴史トピックスを漫画にしてもらい、その成果を『尼崎の歴史ダイジェスト版』に掲載した。

以上のように、本学は、建学以来、地域に開かれた大学づくりを推進してきた。その特色を活かして、尼崎市立地域研究史料館と協働し、地域歴史遺産を活用した多彩な生涯学習講座を開催しているのである。

二　【教育】地域志向科目「つながりプロジェクト」及び「児童教育研究」（ゼミ）

本学では、二〇〇二（平成一四）年度から「経験値教育」を教育コンセプトとして掲げている。「経験値教育」とは、教室で理論的なことを学んだ上で、地域の学びを通して、理論的なことが証明されたり、理性的に考え、納得できたりすること、教室で学んだことが、地域社会でどう活用されるかを実感することで、理論と実践が結びつき、さらに次の学びと発展していく、循環型の教育である。そこで培われる力を「気づく力」「考えぬく力」「コミュニケーション力」「協働する力」「自ら学ぶ力（主体性）」の五つのベンチマークを設け、可視化している。

尼崎市立地域研究史料館と連携した教育の先駆的な取り組みは、二〇一一（平成二三）年、短期大学部生活文化学科情報メディアコースの学生による『図説尼崎の歴史』のWeb化に際してのコンテンツ作りである（垣東弘一「学生によるウェブ版『図説尼崎の歴史』の開発」『地域史研究』第一一一号）。

二〇一三（平成二五）年度からの大学COC事業において、「経験値教育プログラム」の構築を目指した。そして、その中心となったのが地域を志向した必修科目の開講である。尼崎の歴史文化や地域資源を学生が知り、地域課題について考える科目を系統的に学修するカリキュラムを開設した（図4）。

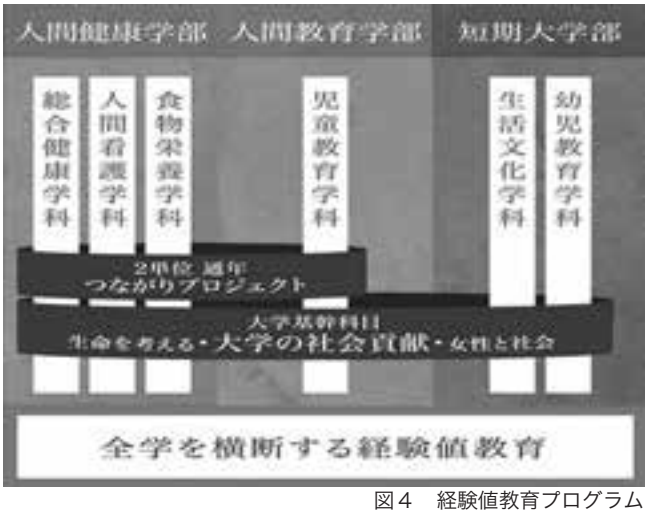

図4　経験値教育プログラム

まず、二〇一三（平成二六）年度から「大学の社会貢献」を開講した。1年次生の大学・短期大学部の全学共通の基幹科目で、大学の所在する尼崎市について知るとともに、どのような地域課題があるか認識することを目的としている。講義には、

No.	プロジェクトテーマ（仮）	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平成31年度
1	教育の情報化による「わかりやすい授業」の実現に向けて	○			
2	地域における感染対策「手洗い教室（講習会）」	○	○	○	○
3	地域資源を活用した安心・安全まちづくり	○			
4	地域子育て支援	○	○	○	
5	健康意識の高い町・尼崎の土台づくりと食育の定着について	○			
6	庄下川環境を利用した地域住民の親水性の向上	○	○	○	
7	運動を活用した健康に暮らせる街づくり	○			
8	地域日本語教育への提言-ボランティア育成の実践と課題-	○	○	○	○
9	学校と地域で創るからだと心の健康	○			
10	長期・短期留学生との交流を通じて異文化理解を深める	○			
11	おもしろき こともなき世を おもしろく	○	○	○	○
12	１００年の森づくりから生物多様性で選ぶプログラムを作る	○			
13	地域の学びプロデュース演習	○	○	○	○
14	まちづくり企画実践演習	○	○	○	○
15	尼崎の女性センターを知り、男女共同参画社会を考える	○		○	○
16	地域に身近な薬局フリースペースにおける健康づくりプロジェクト	○			
17	尼崎探検隊　富松地域	○			
18	あまっこキャリア教育プログラムの開発・実施	○	○		○
19	地域の歴史を知り、地域への誇りや愛着を育む	○	○		
20	武庫地区における市民活動の多様性の理解と実践的研究	○			
21	「笑い」による健康増進プログラムの開発	○			
22	男女共同参画の視点をもった防災・防犯を考える		○		
23	幼稚園・小学校・高等学校での効果的なタブレット活用を考えよう!		○	○	
24	防災　Ｒｅ：デザイン-若者が参加したくなるような防災を考えよう-		○	○	
25	地域に住む高齢者との運動交流プログラム～人つむぎ尼つむぎ～		○		
26	尼崎の歴史・文化を世界に発信する		○		
27	尼崎の森中央緑地で生き物のつながりを楽しむ環境学習を作ろう		○	○	○
28	「笑育」で２１世紀型スキルを磨く		○		
29	小学校でのプログラミング教育		○	○	○
30	子供のための郷土学習教材を作る		○	○	
31	図書館探検隊　図書館革命		○	○	○
32	地元企業連携による休眠知財活用アイデアの創出		○		
33	みんなでつくる展覧会		○	○	
34	地域社会とまちづくり		○	○	○
35	あまっこの挑戦！地域課題解決型・教育プログラムの開発			○	
36	「笑い」を活用した教育プログラム「笑育」の実践			○	
37	地元企業との連携による商品アイディアの創出			○	○
38	「そこらにあるもん」をブレイクさせて、見慣れた町をキラめかそう			○	
39	子どもの貧困支援			○	○
40	村の魅力発見！　香美町小代の宝探し			○	○
41	VR、AR、AIロボット、ドローンなど最新のテクノロジーを体験し、社会に役立つ提案をしよう!				○
42	コンピュータサイエンスをより身近に				○
43	記者リテラシーを活用した表現の実践～地域の情報発信～				○
44	地域での学びの形を考え、実践する				○
45	神戸・南京町から、若者の地域づくりを考える				○
46	女性が活躍できる環境を考える				○
47	地域におけるお寺・神社の可能性～地域資源としての宗教施設				○
48	オブジェ作品を作ろう!!				○
49	尼崎城のまわりの魅力を見つけよう！				○
50	不登校・高校中退の生きる道を探る				○

図５　つながりプロジェクト一覧（2016 年度～ 2019 年度）

尼崎市役所や尼崎商工会議所、地域団体（ＮＰＯ法人、自治会など）からゲストスピーカーを招いて多角的に地域を見る目を養う。令和元年度からは必修科目（短期大学部は選択科目）とし、2年次の地域志向科目の基礎となる科目と位置付けている。

二〇一六（平成二八）年度からは、フィールドに出て地域課題に向き合う課題解決型の演習科目「つながりプロジェクト」（2年次生、必修）という科目を開講した。この科目は、ゼミ形式で一年間（二〇一九（令和元）年度からは半期）、地域の課題について考える。四年間で延べ五〇のプロジェクトを開講している（図5）。クラス編成は、学部学科を横断して編成し、異なる専門領域の学生が地域課題に向き合う。すべてのクラスが地域歴史遺産に関わるテーマで活動しているわけではないが、次のようなプロジェクトがある。

あるクラスでは、地域の方から昔の暮らしの聞き取りを行いまとめる活動をした。また、尼崎市の地域歴史遺産を外国人観光客に伝えるプランを考えたクラスもある。学生たちは地域に足を運ぶとともに、地域研究史料館で関連資料を閲覧したり、史料館の職員の方からレクチャーを受けたりするなど、基礎的な調査で史料館を利用している。本学の学部構成からわかるように、看護師・管理栄養士・保育士・幼稚園の先生など女性の専門職の養成を基本としており、歴史学を専攻する学生を育てているわけではない。学生にとって、史料館は専門科目で利用することはほとんどない。しかし、将来、それぞれの専門職に就いた際、史料館（公文書館）の存在を知ることは大切なことだと考えている。「つながりプロジェクト」は、学科の専門領域を横断したクラス編成で活動し、学生と地域がつながるだけではなく、学生同士もつながり、多面的に地域の課題を考える授業設計になっている。

このように1、2年次で地域を学んだことから、それぞれの学科の卒業論文に向けての演習（ゼミ）でも地域を志向した活動があり、地域課題を卒業論文のテーマとする学生が出てきた。

人間教育学部の私のゼミでは、二〇一〇（平成二二）年から猪名寺自治会の活動に学





図6　猪名寺忍者学校（2015年）

生と参加してきた。猪名寺自治会が世代間交流と地域資源の活用を目的にはじめた「猪名寺忍者学校」で学生企画を実行させていただいている（図6）。佐璞丘を舞台にした忍者学校で「歴史編」と称して、歴史クイズの巻物による宝探しを実施した。楽しく遊びながら、地域歴史遺産を学べる内容となっている。二〇一八（平成三〇）年度には、この活動に参加した保護者、児童にアンケートを実施し、四名の学生が卒業論文に取り組んだ。

また、尼崎市が推進する「尼崎市自治のまちづくり条例」にもとづいて、猪名寺自治会と南清水自治会を中心に園田北小学校区を範囲に「園田北まちづくり協議会」を二〇一七年六月に結成した。協議会では、高齢者の問題、インフラの問題、防災福祉、子育て支援など様々な地域課題に取り組んでいる。二〇一八（平成三〇）年度には、その一つ「歴史自然と地域資源活用事業」があり、尼崎市立地域研究史料館と大学が連携して地域の歴史の編纂を行っている。

もう一か所一〇年近く連携している地域が杭瀬小学校区である。杭瀬小学校では文部科学省の推奨する「地域学校協働本部」（杭瀬小学校区学習センター運営会議）という学校、ＰＴＡ、保育所、企業、社会福祉協議会、行政等の各団体が集い地域全体で小学生を育てていく体制を設けている。本学はその創設期からメンバーとして参加している。

杭瀬での活動は、二〇一一（平成二三）年度には、地域の歴史に関するミニコミ誌（「杭瀬なび。」）を学生たちが聞き取りなどを通じて作成した（図7右）。また、街歩きのマップも作った（図7左）。

さらに、二〇一四（平成二六）年度のゼミでは、地域歴史遺産を子どもたちにどのように伝えていくのかを考えさせるためのプログラムを企画し、3年生向けの郷土学習の授業用教材を作った。

児童は学生の引率でグループごとにスタンプ帳と地図を持って地域を回っていき、地域資源のある各所で地域に方から説明を受ける（図8）。説明を受けたら一箇所ごとにスタンプ帳に学生手作りのスタンプを押印してもらい説明



図7　杭瀬なび（2011年）



図8　くいせ探検隊（2014年）

カードをもらう。全てのポイントを回り終わって学校に戻った後、カードの裏面の地図のジグソーパズルに挑戦する。パズルが完成すると戦後すぐの地図になる。それをまち歩きに使用した現在の地図と比べて景観の変遷について学んでもらうというものである。この教材は、杭瀬小学校3年生の児童数分作成し、学校に寄贈しました。カードの解説文や地図については、地域研究史料館で調査した。

二〇一五（平成二七）年度には、尼崎市が市内に住む全小学生にする配布した市制一〇〇周年双六「あまろく」をゼミ学生が市の担当者と一緒に作成した（図9）。尼崎市の一〇〇年間の出来事をマスに落としたもので、人口減少や阪神淡路大震災、



図9　われら尼っ子100あまろく（2015年）

あるいはジェーン台風の被害などネガティブな歴史も含んでいる。項目の選定や双六のデザインやイラストは全て学生が作った。項目の選定にあたっては、地域研究史料館のホームページや刊行物を調査した。

以上の事例のように人間教育学部の学生を中心に、地域活動で子ども向けのプログラムを展開している。猪名寺（園田北小学校区）、杭瀬のいずれも一〇年間にわたって連携事業を展開している。つながりプロジェクトの学生の受け入れやゼミの受け入れをはじめとして、ボランティア体験やスクールサポーターなど園田学園女子大学と地域との深い関係を築くことができている。そして、多様な地域での教育活動を実施するにあたって、地域研究史料館は調査・研究において欠くことのできない存在である。

三　【研究】『尼崎百物語』と地域歴史遺産データベース

尼崎市をフィールドにした「地域資源を活用したまちづくりモデル構築のための基礎的研究――歴史文化遺産としての民俗文化財の発掘――」という共同研究を平成二六年度から継続している。

この研究では、尼崎市域六行政区に伝わる、民間説話なかでも怪異・霊験譚、あるいは妖怪に関する話などいわゆる「フシ

【ゼミ活動での取り組み】
2010 年　猪名寺盆踊り
　「HAPPY　MAPPY（塚口グルメガイド）」制作　尼崎商工会議所
2011 年　猪名寺盆踊り
　「杭瀬なび。」制作　尼崎商工会議所
2012 年「杭瀬なび。」街歩き編制作　杭瀬アクション倶楽部
2013 年
2014 年　杭瀬たんけん隊　「杭瀬小学校郷土学習教材（街あるきカード）」制作
2015 年　猪名寺忍者学校　「尼崎市制 100 周年すごろく　あまろく」制作
2016 年　猪名寺忍者学校　　NPO 法人やんちゃんこ　(株) 栄水化学
2017 年　園田北まちづくり協議会／猪名寺忍者学校
2018 年　園田北まちづくり協議会
　／猪名寺忍者学校・園北ボンズ（ふるさとづくり青年隊 / 兵庫県青少年本部）
2019 年　園田北まちづくり協議会／猪名寺忍者学校
　杭瀬小学校学校地域協働本部
　東園田社会福祉連絡協議会（上坂部小学校区）

図 10　児童教育研究（ゼミ）の地域連携活動

ギな話」についてのデータベースの作成を目指している。「フシギな話」は、本来地域に根差したコミュニティによって伝承されていくものであり、それ自体がひとつの文化遺産と言える（大江篤「尼に伝わる不思議な話」『南部再生』vol.47、二〇一四）。そのような伝説、伝承から地域の歴史を明らかにすることを重視したのが、日本民俗学の創始者、柳田國男であり、その初期の著作『遠野物語』は現代にも読み継がれ、遠野市の地域資源としてまちづくりにも活かされている。宮本常一は、柳田國男の『遠野物語』を読んだときの感想を「われわれは、そういう話はごくありふれた話なので、つまらないものと思っておった。それがそうではなかった」といい、「こういうものが学問の素材になるのかということをひじょうに強く考えさせられた」と述べている（伊藤幹治・米山俊直編『柳田國男の世界』（日本放送出版会、一九七六）。このように「ありふれた」「つまらない」ものを「学問の素材」として、いわば「ありふれた」人々の生活、歴史を再現する手段として再評価したのである。

そして、全国各地で民俗調査が実施され、様々な「フシギな話」が収集、蓄積されることになった。柳田以前にも江戸時代の地誌や怪談集に同様の記事が書き留められている。兵庫県では、播磨の『西播怪談実記』（宝暦四〈一七五四〉）や淡路の『堅磐草』（天保三年〈一八三二〉）、丹波の『多紀郡郷土史考』（一九五八）、但馬の兵庫県教育委員会編『但馬海岸』（一九七四）などがある（大江篤「兵庫の怪談」『幽』vol.17、二〇一二）。しかし、これらの史料は、一般に目にすることが困難なものも多い。

尼崎市の伝説は、『尼崎市史』にふれられているものの、まとまったものは公刊されていない。そうしたなか平成元年に尼崎市立北図書館が「尼崎の伝説展」を開催し、平成三年に『尼崎の伝説』という手作りの冊子を刊行した。その製作に尽力されたのが羽間美智子氏である。『尼崎の伝説』は、各地の伝説の梗概をまとめ、史料・地誌・伝説集など出典が明記されている点が特色である。それを元に羽間さんが実施した聞き取りを含め、尼崎郷土史研究会が会報『みちしるべ』三三号・三四号（二〇〇五・二〇〇六）で「特集　尼崎の伝説」を組んだ。貴重な成果であるが、会員頒布の雑誌であり、尼崎市立地域研究史料館はじめ、市内の図書館でしか閲覧することができない。

そこで、本学の共同研究では、尼崎郷土史研究会の成果を基礎に、新たなフィールドワークや尼崎市立地域研究史料館、尼崎市立文化財収蔵庫で調査を行い『尼崎百物語』（神戸新聞出版文化センター、二〇一六（平成二八）年）を刊行した。この書では、共同研究者とともに地域研究史料館の共同執筆で、尼崎の民間説話を約一〇〇話集めてまとめた。

『尼崎百物語』で紹介した地域に伝わる民間説話が文化財に指定されることは現行の文化財保護法の枠の中ではまずありえない。美術工芸、建造物や埋蔵文化財と比較すると取るに足ら

ないものと理解されることが多い。したがって、現在、『尼崎百物語』のデータベースを作成し、研究を継続している。データベースにおいては、典拠をはっきりと示すこと、関連する画像データも含めてデータベース化すること、伝承地の場所を個人情報の問題がない範囲で地図情報とリンクさせて示すことを考えている。なかでも、民間説話は、長い時代の変遷のなかで、社会や文化の置かれる状況によって変化するものである。したがって、伝承の変遷について史料的根拠をもって示すことを重視している。さらに、一般の方々が典拠となる史料に容易にアクセスできるように、国立国会図書館や尼崎市立地域研究史料館のOPACのリンクを行う予定である。



図 11　百物語データベース～尼崎～

民間説話を含め、地域歴史遺産は少子高齢化の中で消失の危機に立たされている。地域を愛する人やまちづくりに地域歴史遺産をどのように活用するかを考える場合、まずやらなければならないのは、地域歴史遺産を総合的に把握できるデータベースの構築であろう。たしかに、文献資料とか埋蔵文化財のデータベースはいくつか存在している。しかし、地域に伝わる説話や民俗文化財のデータベースはほとんどない。やはりそれらも含めた総合的なデータベースが構築を今後目指していく必要があるだろう。

そのためには、地域の高等教育機関である大学と行政の地域歴史遺産を扱う諸機関（文化財担当部署、公文書館、図書館等）が密接に連携し、地域歴史遺産に関する調査、研究を深めていくことが重要であると考える。

むすびにかえて

以上、本稿では、園田学園女子大学の近年の地域連携事業を紹介しながら、尼崎市立地域研究史料館との関りを述べてきた、最後に今後残された課題についてまとめたい。

まず、尼崎市内の数少ない高等教育機関である大学の役割である。地域社会において大学は「地（知）の拠点」としての役割を担っている。本学では、その機能である〈教育〉〈研究〉〈社会貢献〉のそれぞれにおいて、次のような課題を抱えている。

本学は〈経験値教育プログラム〉を構築し、社会的、精神的、そして経済的に自立した女性の育成をめざしている。そのなかで、国家資格をめざす学生たちにとって地域歴史遺産を学修することはどのような意義があるだろうか。学問領域として歴史学を専門としない学生にとって地域歴史遺産を学ぶことの意味、社会人としての教養の一つである地域歴史遺産について、教育プログラムの検討を継続的に行わなければならない。

そして、教育の基盤となる研究について、本学では、大学の重点研究として、地域志向研究を推進している。先に述べたデータベースの構築にあたって、今後、基礎的な史料調査を含めて、深めていく必要があろう。

さらに、人生一〇〇年時代の生涯学習は今後どのように展開していくべきか。二〇一九年度で四〇周年を迎える本学の生涯学習プログラムも研究のシーズと社会のニーズをマッチングしていかなければならない。

〈教育〉〈研究〉〈社会貢献〉が三位一体となって機能することによって、園田学園女子大学は尼崎市においてかけがえのない「地（知）の拠点」となりつづけるであろう。

さらに、二〇一九（平成三一）年四月には文化財保護法が改正され、地域歴史遺産をとりまく状況が大きく転換を遂げようとしている。改正文化財保護法では、過疎化・少子高齢化などを背景に、文化財の滅失や散逸等の防止が緊急の課題であり、未指定を含めた文化財をまちづくりの核とし、社会総がかりで、その継承に取組んでいくことが必要であることが強調されている。そして、地域における文化財の計画的な保存・活用の促進や、地方文化財保護行政の推進力の強化、個々の文化財の確実な継承に向けた保存活用制度を見直し、地方における文化財保護行政の推進力強化を図るとされている。また、地域にある文化財をまちづくりの資源として地域創生に活用していくことや、市町村における「文化財保存活用地域計画」の策定、文化財担当部署の首長部局への移管の容認、民間団体による文化財活用の促進なども文化財保護法および関係法の改正に盛り込まれており、従来の文化財保護重視の姿勢から活用への転換が図られつつある。

そうした中、尼崎市では、現在、尼崎市立文化財収蔵庫がある旧城内中学校の校舎を耐震改修し、文化財収蔵庫と地域研究史料館の機能をあわせ持つ「歴史館」として整備し、二〇二〇（令和二）年秋にオープンする予定である。このような状況の中で、大学と地域研究史料館をはじめとする地域歴史遺産に関わる機関と尼崎郷土史研究会等の市民団体が連携し、そこに暮らす人たちにとって地域歴史遺産をどのように活用できるかは、持続可能なまちづくりにとってなくてはならない。小さな大学の小さな取り組みを積み重ねていくことから、地域文化遺産の活用の「尼崎モデル」の構築を目指していきたいものである。

参考文献

尼崎郷土史研究会 二〇〇五・二〇〇六「特集　尼崎の伝説」（会報『みちしるべ』三三号・三四号）
伊藤幹治・米山俊直編 一九七六『柳田國男の世界』（日本放送出版会）
岩崎奈緒子 二〇一九「歴史と文化の危機―文化財保護法の「改正」―」（「歴史学研究」第九八一号）
大江篤 二〇一二「兵庫の怪談」『幽』vol.17
大江篤 二〇一四「尼に伝わる不思議な話」（『南部再生』vol.47、二〇一四）
大江篤 二〇一五「経験値教育と地域創生」（「大学時報」第三六三号）
大江篤 二〇一七「小学校社会科と民俗学―兵庫県の民俗文化財を中心に―」（「地域連携推進機構年報」第四号）
大江篤 二〇一八「民俗文化と地域―但馬地域の事例を中心に―」（『地域づくりの基礎知識1）地域歴史遺産と現代社会』、神戸大学出版会）
大江篤編著 二〇一六『尼崎百物語』（神戸新聞総合出版センター）
大江篤・久禮旦雄・久留島元 二〇一四a「尼崎伝説データベース（稿）」（『地域連携推進機構年報』第一号、平成二六年）
大江篤・久禮旦雄・久留島元 二〇一四b「地域の伝説・伝承データベース作成と活用の可能性～尼崎を事例に～」（「情報処理学会研究報告・人文科学とコンピュータ研究会報告」（2014-CH-103(7)））
垣東弘 二〇一一「学生によるウェブ版『図説尼崎の歴史』の開発」（『地域史研究』第一一一号）
杉本宏 二〇一八「文化財保護法改正における展望と課題について」（『文化遺産の世界』Vol.33）
園田学園女子大学 二〇一八『経験値教育と地域創生―地（知）の拠点としての大学』、神戸新聞総合出版センター
村井良介・大江篤・堤邦彦・久禮旦雄・小池淳一 二〇一七「シンポジウム　地域歴史遺産としての怪異伝承―『尼崎百物語』を起点に―」（『地域史研究』第一一七号）